

太田東西かわら版

おんころころ せんだりまとうぎ そわか

2025. 3

「魂」への 処方箋



2月23日、水墨画家の浦正（うらただし）さんと石丸文行堂さんでトークライブを行いました。立ち見も出るほどの大盛況。＼(^o^)/
浦さんは神奈川県在住。首都圏で活動されていますが長崎市出身です。故郷に錦を飾った＜長崎初個展＞となりました。

浦さんと私の出会いは、お母さまの健康相談を受けたことからでした。年も近く、考え方生き方もとても良く似ている。何よりお互い“組織が苦手の一匹狼”。生業（なりわい）は水墨画と漢方。全く違う分野ではありますが、“それに込める想い”。共通していました。

薬局でも販売している浦さんの水墨画絵本

<モリスのコトリ>

ぜひ、1家に1冊お求めいただきいただき
何度も「音読」されることをおすすめします。

これはただの絵本ではないのです。
<魂への処方箋>です。

不安・心配・恐れ
のネガティブ思考が
いつしか薄れて、
勇気・覚悟・安心感の
ポジティブ思考に
変わっていく。

なぜか?…… 心ではなく、それが“魂に”響くからです!



トークライブでとても反響が良かった、薬局のお客様にもお伝えしたい
話題を3つ、今月号のかわら版でご紹介します。

1. 母子同服

母親が子どもに<モリスのコトリ>の絵本を読み聞かせる。

「子どものために」と思って読んであげていた親自身も、いつしか
明るく元気になっていた。子どもに対して「危ないからやめなさい!」
「ダメ!」「バカ!」「勉強しないなら大人になって苦労するよ!」。
子どもを否定するそうした発言が、いつしか親から消えていた。

そうした驚きの事例がこの絵本にはあるのですが、それは太田東西薬局の
漢方健康相談でもよくあることです。

頭が痛い、朝起きれない、食が細い、不登校、うつ… 子どものそうした
不調の相談をたくさん受けて来ましたが、私はその原因を子どもだけに
見出しません。家族の問題、特に「母親の心身」を重要視しています。
例外なくお母さんの心身はボロボロ。自己犠牲の子育てになっています。

私の方針は「母子同服」。同じ漢方を母子2人で服用してもらいます。
頭痛の子ども。一方、母親に頭痛はない。そんな場合も「母子同服」。
母子で同じ漢方を服用してもらおうと、驚きの効果が得られます。

今の医療は個人個人を診て薬を出します。子どもなら迷わず小児科。
病院の西洋医学とは違って、漢方は「つながり」を大切にします。

<モリスのコトリ>の絵本を通じて、いつしか母子ともに明るく元気になっていた。それは漢方での「母子同服」に相通じています。

母子が“つながって”いるから、健康に良い習慣を重ねていくと、双方に良い結果が得られるわけです。

子どもが両親に挟まれて、川の字で寝る。その日本の「つながり文化」が戦後、西洋の個人主義（ベビーベッド、個室）に席卷されました。

子どもが引きこもっている、話をしない、笑わない・・・ならばお父さんお母さんで子どもを挟んで、川の字で添い寝して<モリスのコトリ>の絵本、読んであげてください。子どもの年齢は関係ありませんよ。健康を失った時、人は誰でも「根源なる母性（絶対安心）」求めるもの。あつ、寝る前の漢方もお忘れなく😊😊

2. 「書かない・描かない」と脳が腐る！

昨年オックスフォード大学が発表した「ブレインロット」。スマホのし過ぎで、知らず知らずに「脳が腐っていく」と警笛を鳴らした新語です。

今、相手の話を黙って聞けない人間が増えています。子どものそれをADHDだとレッテル貼りしている大人たちも、落ち着きがありません。スマホの登場は、良くも悪くも現代人に多大な影響を与えています。

ちょっと前なら、相手の話を聞く際には、メモを取っていた。ノートに手書きしていた。それが今では、画面をタップ（人差し指で押す）という行為に変わった。適切な漢字の候補も、画面に自動的に出て来る。それをタップするだけ。パソコンのキーボードしかり。不自然な指の動き。有史以来、人はそんな手指の使い方・脳の使い方を経験したことがない。

何度も何度も見返さなくても、書いて覚えなくても、スマホ・パソコンが教えてくれる。皆さんは経験ないですか？ 手紙や書類を書く際に、漢字が思い出せない…スラスラ書けない…というブレインロットの瞬間。

ネットの動画視聴やゲーム。無料ということもあり、時間があればそれに意識が向く。長い動画よりも、たくさんのショート動画を次から次に見る。早くて、新しくて、強い刺激をどんどん求め続ける。

時間をかけてじっくりと「水墨画を描く」「漢方をコツコツ続ける」。それができない、結果を急ぐスマホ人間は“ブレインロット予備軍”。便利になればなるほど、人間は退化し頭はバカになっていくものです。

3. 「感性」を磨く。

浦さんの作品のほとんどは数十万円単位です。浦さんに尋ねてみました。「とても高く買えないという声に、自信をなくすことはないですか？ 浦さんは笑みを浮かべながら答えました。

「どうぞゆっくり観て帰られてくださいと答えています。私の作品は“生き物”です。命を吹き込んでいます。命・生命力の吹き込み度が作品のエネルギーであり、それに見合うプライスになっています。お買い求めくださる方々に、大金持ちの人はいません。私の込めた想いを作品の息吹を感じ取ってくださった方々に手にしていただいています」

浦さんの水墨画は写メ OK！ SNS 掲載 OK！ プリント OK！
なぜ OK なのか？ それも尋ねてみると、やはり同じ答えでした。
「写真に命は宿っていません。“命ある作品”を創作していくのみです」

部屋のオブジェ。スマホの待ち受け画面。それだけなら、コピーで OK。でもそんなことを繰り返していたら、その人に「感性」は育ちません。感性とは、作品（対象物）をじっくり味わい、本質を見抜く想像力。

「漢方は高く買えない（飲めない）。
今でもよく耳にします 😊
ドラッグストアの漢方と太田東西薬局の漢方。
どうしてそんなに価格が
違うのか？ 私の漢方には、浦さんの作品と
同じく「生命力」が宿っているからです。
作り手の「幸せになってほしい」という作品に
込めた想い。そのエネルギーの差こそが
価格の差に反映されていると考えています。

浦さんも私も「たくさん売ればいい」という
スタンスではありません。たくさん売れるのは
嬉しいですが、数字よりも大切なことがある。



作者の想いとお客様の感性。それが通じ合った時こそが、至高の喜び。

<モリスのコトリ>の絵本と私の漢方は、感性を失ってしまった日本人の

<魂への処方箋>なのです！！\(^o^)